

信じ委ねた2年目堀井監督の下で個々の力開花



慶大・堀井監督(左)(20年9月13日)

慶大が19年秋以来3季ぶり38回目の優勝を果たした。今週は試合がなかったが、優勝の可能性を残していた立大が明大に敗れたため、最終週の早慶戦を待たずに優勝が決まった。

堀井哲也監督(59)は就任2年目、3季目で初優勝。1年目は2位、2位と、あと1歩が続いた。「学生に悔しい思いをさせてしまった。結果はしょうがないとはいえ、もうちょっと、うまくやったら何とかなったのではないか」。自問自答が続いた。迎えた2年目。昨年以上に、選手の力を信じた。「学生は、植え付けるまでは時間がかかる。ただ、一定の段階を過ぎると、ものすごく自分たちで考え、工夫する」。最初の確認作業は密にし、後は選手自身の手委ねる

時間を増やした。個々の力が開花するきっかけをつくった。

今季の強さを「1つは、投手。森田、増居の2人の先発がしっかり投げきってくれ、捕手の福井を含めたバッテリーの守備力が大きい。2つ目は、広瀬、渡部から、3番は変わったが、福井、そして正木、下山と上位打線が点を取る。必ずしもヒットじゃなくても。打順として機能している」と分析した。第6週終了時点で、森田晃介投手(4年=慶応)、増居翔太投手(3年=彦根東)はリーグ1、2位の防御率。チーム打率2割5分8厘はリーグ3位にとどまるが、総得点51は、チーム打率3割超でリーグ1位の明大と並ぶトップタイだった。安定した投手陣を背景に、打線は安打以外でも着実に得点を重ねた。選手の力を信じた堀井監督の下、投打がかみ合い、開幕黒星からの7連勝で栄冠を手にした。

【古川真弥】

▽立大・太田英毅主将(優勝を逃し)「今日、勝たないと、全試合の意味がないことは選手全員が分かっていた。今までにない悔しさがある。それを原動力に、秋は勝てるようにしたい」

昨秋V目前から涙、2部練習導入でしぶとさ生んだ



2021年5月23日21時39分

東京6 大学野球春季リーグ戦優勝を喜ぶ慶大の、左から森田、福井、正木(慶大野球部提供)

朗報は、オープン戦後の反省ミーティング中に届いた。堀井監督は「非常に光栄。選手が悔しさを乗り越えてくれた」と目を細めた。2位が続いた。特に昨秋は、早大2回戦で優勝目前の9回2死から逆転2ランを打たれ、涙をのんだ。再スタートは、キャプテンの直談判から始まった。敗戦翌日、神宮球場近くの喫茶店で堀井監督と福井章吾主将(4年=大阪桐蔭)が向き

合った。どうすれば勝てるか? 4時間近く腹を割った。福井は「慶応大学は練習量が足りません」と訴えた。レギュラーでも半日練習で、後は自主性に任せるのが慶大スタイル。「練習量を増やすデメリットも分かっていました。でも、やらないと強くなれない」と、午前、午後の2部練習とした。反発もあった。だが「目指す

のは勝つことじゃないのか」とチームに問いかけ、束ねていった。開幕黒星からの7連勝で頂点に立った。今季の強さを、堀井監督は「バッテリーも含めた守りと、つなぐ打線が機能したこと」とみる。練習量アップが投手陣のスタミナや打撃のしぶとさを生んだ。天皇杯を手にした上で、最終週の早大戦を迎える。「早慶戦で勝って終わることはぶれません」と福井。昨秋の雪辱も果たす。

【古川真弥】

昨秋の慶早戦、9回表2死一塁、早大蛭間の打席で慶大・堀井監督は木沢から生井に継投も逆転2ランを浴びる(2020年11月8日撮影)



慶大強さ「打てなくても点は取れる」 2021年5月23日 21時31分

「打てなくても点は取れる」野球を見せた。慶大のチーム打率は2割5分8厘でリーグ3位。明大の3割2分8厘とは7分も差があった。それでも総得点は10試合消化の明大が58、8試合の慶大は51。大差はなかった。明大は58点中の55点までが打点になる。慶大は51点中に40点しかない。残る11点は失策8、暴投2、ボーク1で稼いだ。本塁打を含む打点も適時打は30点。あとの10点は内野ゴロ4、押し出し3、犠飛2、野選1で点にした。開幕戦で法大・三浦にノーヒット・ワンランを喫した。堀井監督は攻撃陣を責めず、逆に「四球6つを選んだ。そういうところからチャンスをつかむきっかけはつくれた」と評した。

四球を口火にした得点が15点もある。唯一の黒星、**ノーヒット・ワンランが、今季慶大の戦いを導いていた。**

【米谷輝昭】(C)2020,Nikkan Sports News.nikkansports.comに掲載の記事・写真・カット等の転載を禁じます。

朝日新聞 早慶戦待たずに

DIGITAL

昨年は春秋とも優勝まであと1勝に迫りながら涙をのんだ慶大が、早慶戦を待たずに頂点にたった。「六大学で優勝する難しさを味わった」と話すのは主将の福井。とくに秋は早慶戦であと1アウトから逆転本塁打を打たれた。その試合では3年生以下が8人も先発出場。悔しさをかみしめた選手たちは「自分たちに足りないものは何かを探し、生活習慣や環境整備から取り組んだ」という。今季は初戦こそ敗れたものの、その後は7連勝。福井は「**堀井監督が求める粘り強い野球ができた結果**」と胸を張った。

中日スポーツ “ノーヒットワンラン”負けから7連勝

早慶戦待たず慶大V決定...堀井監督就任後は初

2021年5月23日(日) 20:36 配信 最終更新:5/24(月) 11:03

優勝の可能性を残していた立大が明大に1-4で敗れ、試合がなかった慶大が2019年秋以来3季ぶり38度目のリーグ優勝を決めた。立大は6勝3敗1分けでポイント6・5に終わり、ポイント7の慶大を上回れなくなった。慶大は6月の大学選手権で34年ぶりの日本一を目指す。東大は法大を2-0で破り、17年秋以来7季ぶりの白星で、連敗を64で止めた。元中日の井手峻監督(77)は就任3季目で初白星。立大は2位、明大は6勝4敗のポイント6で3位、法大は4勝5敗1分けの同4・5で4位となった。



NTT東日本との練習試合後に、優勝の知らせがもたらされた。JR東日本を率いて都市対抗も制覇した慶大・堀井哲也監督(59)は3シーズン目で初のリーグ優勝に「ピッチャーを含めたディフェンス陣とつなぐ打線が機能した」とうなずいた。法大との開幕戦で1-2。無安打1得点の“ノーヒットワンラン”で負けたが、すぐに立ち直って7連勝した。原点は昨秋の早大2回戦だ。優勝目前の9回に蛭間に逆転2ランを浴びてV逸。今季チーム打撃2冠の3本塁打、11打点の4番、正木智也内野手(4年・慶応)は「ライトを守っていて(逆転弾が)バックスクリーンに当たった音は今も覚えている。何が足りなかったかを模索して、勝ちへの執念、ワンプレーへの泥くささが浸透して7連勝につながった」と強調した。慶大野球部の目標は常に「リーグ優勝」「早稲田に勝つ」「日本一」。「リーグ優勝をもって早稲田戦に臨めます」と堀井監督。29日からの早大戦で昨年の先輩たちの無念を晴らし、6月の全日本大学選手権で1987年以来34年ぶりの優勝を果たす。

(黄色地紋: 林 莊祐) ■